

駄菓子屋の教育的機能

－子どもと店員の関わりを通して－

岩本廣美

(奈良教育大学社会科教育研究室)

細谷恵子

(高松市立山田幼稚園)

Educational Function of DAGASHIYA(Traditional Cheap-Candy Shop for Children)

Hiromi IWAMOTO

(Department of Social Studies, Nara University of Education)

Keiko HOSOTANI

(Yamada Kindergarten, Takamatsu-shi)

Abstract : We can often find some children go to DAGASHIYA (traditional cheap-candy shop for children) at their free time. The purpose of this paper is to make clear educational function of DAGASHIYA by means of observing children's behavior and hearing conversation between children and shopkeeper in the corner of DAGASHIYA. The results are as follows : 1) Children who most frequently go to DAGASHIYA as customers are higher grades girls of elementary school. 2) When children come to DAGASHIYA for buying some sweets, shopkeeper usually talks with children about various topics. For example they are about children's favorite sweets, everyday life of children, school event, and etc. 3) As DAGASHIYA shopkeeper observes and understands children who come to the shop in detail, children recognize shopkeeper one of their companions and are able to identify themselves.

キーワード : 駄菓子屋 DAGASHIYA (traditional cheap-candy shop for children)、子どもの生態 children's behavior、店員 shopkeeper、公式的な教育 formal education、非公式的な教育 informal education

1. はじめに

子どもの人間形成に寄与する大人の活動を教育実践であると定義すれば、そのもっとも典型的・代表的なものは、家庭教育を別にして、教師による学校での教育実践であろう。一般に学校では、専用の施設において、明確な目標と教育課程にもとづき、教育の専門家によって計画的に教育実践が推進されていく。また、一般社会では学校での教育実践によって相応の教育成果がもたらされると期待されており、そのために、公立学校の場合は一定の公的資金が投入されて当然ともみなされている。こうした学校のような教育機関における教育実践を、本研究では公式的（またはフォーマル）な教育実践と呼ぶことにする。いっぽう、専門家によらない教育実践や、教育課程が定められずに行われる教育実践も、多くの人々によりさまざまな場面で行われているといえよう。たとえば、民間非営利団体が休日に子ども向けのワークショップを開催し諸活動

を展開する場合や、学校への通学路上で保護者が自主的に、登校する子どもたちの安全管理をすることなどが挙げられる。これを非公式（またはインフォーマル）な教育実践と呼ぶことにする。

駄菓子屋の店内で店員が子どもと関わりを持つことを非公式な教育実践と捉えれば、それはおそらく教育実践という全体系の中でもっとも周辺部分に位置づけられるものと考えられる。したがって、駄菓子屋における子どもの生態や店員との関わりを確実に把握することは、非公式な教育実践の典型例を具体的に解明する第一歩になると思われる。本研究では、こうした観点から駄菓子屋を取り上げ、駄菓子屋での店員による教育実践の一端を解明しようとするものである。

これまでに子どもとの関わりで駄菓子屋を取り上げたあるいは駄菓子屋に言及した研究はいくつか見られる（加太1979、岩本1981、斎藤1983、木下1996、深谷1996、本田1999、加藤2000、酒川2004）。しかし、こ

これらの研究は概して、子どもの側から見た地域社会や遊び環境の中の駄菓子屋を取り上げたものであって、駄菓子屋における店員の役割あるいは教育機能的側面を必ずしも評価してはいない。あるいは、駄菓子屋に教育的機能が備わっていることを認めていても、駄菓子屋を過去のものとして扱い、現在では地域社会から駄菓子屋が消失していると捉えている場合も見られる。唯一、松田（1998、2002）が、駄菓子屋に備わる16の価値のひとつに「しつけ」を挙げており、駄菓子屋には、来店する子どもに対して店員がしつけを行っている側面があるという認識を示しているにすぎない。ただし、松田の研究では、店員と子どもとの関わりを明らかにするデータを具体的に示しているわけではない。

本研究は、駄菓子屋の店内での子どもの生態や店員と子どもとの間で交わされる会話を明らかにすることを目的とする。そうした実態把握を通して駄菓子屋の教育的機能の性格や特徴を考察し、学校における教育実践のあり方を再検討する手がかりとしたい。

本研究でいう「駄菓子屋」とは、本来の意味での「駄菓子」を販売する店に限定せず、子ども向けの菓子類等を販売し子どもが有力な客層になっている商店を指して呼ぶことにする¹⁾。また、本研究で「子ども」といった場合とくに断りのない限り小学生を指している。

実態把握のための調査は、2001年（平成13）5月から10月にかけて筆者らのうち細谷（以下「調査者」と記す）が行った。取り上げた駄菓子屋は、奈良市の旧市街地および周辺に立地するA、B、Cの3店²⁾である。奈良市の旧市街地付近で実態調査を行ったのは、調査者の居住地との近接性を考慮し、繰り返し訪問するうえで有利であるという便宜的理由による。調査者は、小学校の放課後の時間帯や休日を選び、各駄菓子屋店内の隅に毎回約2時間座って来店した子どもおよび店員に関わる次の事項について実態把握を行った。

- 1 来店した子どもの学年、性別、人数
- 2 来店した子どもの店内滞在時間
- 3 店員と子どもとの間に交わされた会話内容

これらの事項のうち、来店した子どもの学年は、会話内容から判断したほか、店員からの聞き取りを随時実施することによって把握した³⁾。

実態を把握できたサンプル数は、それぞれ延べ数で、A店90人、B店53人、C店10人であり、3店合計153人であった。店ごとのサンプル数は、C店がとくに少なく、偏りがあるため、以下の分析・記述にあたっては、原則としてA、B、Cの3店を一括して扱うこととし、必要に応じて店ごとに記述する。

2. 駄菓子屋における子どもの店内滞在時間

子どもが駄菓子屋に来店した際に、店内あるいは店の前でしばらくの時間を過ごすことは先行研究においてもしばしば指摘されてきた（松田、2002）。このことは、駄菓子屋への子どもの来訪目的が買い物だけではないと認識されてきたことを示している。買い物以外の目的とは、主として、子どもがいわゆる「居場所」（松田、1998）を求めることであると考えられる。しかし、先行研究においては、来店した子どもがどのくらいの時間を過ごしたのかが具体的に示されてはこなかった。そこで、本研究では、子どもの来店を確認しえたすべてのサンプルについて、店内に滞在する時間を把握し、記録した⁴⁾。同時に各サンプルについて、子どもの学年、性別、人数をも把握し、滞在時間との関連を検討した。店内滞在時間は、子どもが当該の駄菓子屋に対して懐いている親近感や店内での居心地の良さなどを表す指標のひとつになると考えられる。もし店内滞在時間が買い物自体に要する時間より長い場合は、店員と子どもとの間のコミュニケーションが図られると同時に、店員と子どもとの関わりが深まることを意味し、それだけ教育実践の機会が広がることをも意味していることになる。

2. 1. 店内滞在時間の全般的傾向

本研究では、店内滞在時間を把握しえた全サンプルを、1分以内、1分を超え5分以内、5分を超え10分以内、10分を超える（以下「1分以内」、「5分以内」、「10分以内」、「10分を超える」とそれぞれ表す）の4段階に区分した。「1分以内」は、買う商品を予め決めたくて来店し、買い物を終えるとただちに退出する場合に相当し、買い物目的の来店であると判断しえる。「5分以内」は、買い物が主たる目的であるが、買う商品を予め決めてこなかった来店に相当すると判断しえる。「10分以内」は、買い物よりはどちらかといえば「居場所」を求めての来店であると判断しえる。「10分を超える」は、買い物を半ば「口実」にして

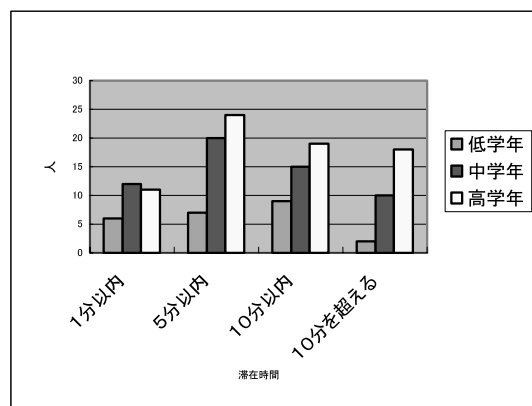


図1. 学年グループ別店内滞在時間別人数

「居場所」を求めるとして来店した場合であると判断しえる⁵⁾。A、B、Cの3店全体のサンプルを学年別かつ4段階に区分してそれぞれの人数を示したのが図1である。

全体の人数はそれぞれ、「1分以内」が29人(19.0%)、「5分以内」が51人(33.3%)、「10分以内」が43人(28.1%)、「10分を超える」が30人(19.6%)であった。この結果から、駄菓子屋での子どもの店内滞在時間には、かなりのばらつきがあることが明らかである。1分以内で買い物の用事を済ませてしまう子どもは2割近くに達し、滞在時間のきわめて短い子どもも少なくないことがわかる。また、全体の半数強の子どもは、店内滞在時間が「1分以内」または「5分以内」であることから、買い物を目的に駄菓子屋に来ている子どもも多いことがうかがえる。いっぽう、全体の半数近くの子は、「10分以内」または「10分を超える」に相当し、来店目的が買い物以外であると判断される。駄菓子屋に来店する子どもの目的は多様であり、一括して捉えることには無理があるといえる。

2. 2. 学年と店内滞在時間の関係

サンプルとなった子どもの学年を低学年、中学年、高学年の3グループに分けて検討する(図1)。駄菓子屋に来店した全サンプルの学年グループ別人数は、低学年が24人(15.7%)、中学年が57人(37.3%)、高学年が72人(47.0%)であった。駄菓子屋に来店する子どもの数は、学年の進行に伴って増加する傾向が明瞭に読み取れる。こうした傾向が現われる要因は2つあると考えられる。ひとつは、駄菓子屋へは、子どもだけで来店する場合がほとんどであるが、学年の進行に伴って子どもだけで外出できる割合は高くなることとの関連があるためであろう。言い換えれば、駄菓子屋への来店は子どもの自立傾向との関連があるのではないかということである。もうひとつの要因は、学年の進行とともに、子ども自身の判断で使える「小遣い」が増加する(深谷, 1991)こととの関連があるためであろう。ちなみに、深谷らの調査(2002)によれば、学校から帰宅した際に家に誰もいない子どもの割合は、21.9パーセントであるが、この数字は学年の進行に伴って上昇している。駄菓子屋への来店人数が学年進行とともに多くなるのは、このこととも関連していると考えられる。

次に、学年グループごとに店内滞在時間との関連を検討する。低学年グループは、サンプル数が多くないため明確なことは言いえないが、「1分以内」が6人、「5分以内」が7人、「10分以内」が9人であるのに対し、「10分を超える」はわずかに2人にとどまっている。低学年の子どもは、判断や動作のスピードが上の学年に比べるとやや緩慢な様子が観察され、そのため駄菓子屋での買い物に要する時間が多少長いことを考

慮すると、多くは買い物目的の来店であるといえよう。調査者の観察によると、低学年の子どもは自分から店員に話しかけることは少なく、むしろ店員のほうから子どもに声をかけている場合がしばしば確認された。中学年グループは、「1分以内」が12人、「5分以内」が20人、「10分以内」が15人、「10分を超える」が10人であった。全体で57人のうち過半数を占める32人が5分以内の滞在であることから、中学年の子どもの場合もどちらかといえば買い物目的の来店のほうが多いといえよう。ところが、高学年グループの場合は、やや異なった傾向が認められる。「1分以内」が11人、「5分以内」が24人、「10分以内」が19人、「10分を超える」が18人であった。全体で72人のうち、「1分以内」の占める割合はわずかに15%ほどにとどまり、この割合が低学年グループ25%、中学年グループ約21パーセントと学年の進行とともに低下していることが読み取れる。いっぽう、「10分以内」と「10分を超える」の合計は37人となり、全体の過半数に達している。これらのことから、高学年グループの子どもは、駄菓子屋に来店する真の目的が買い物以外にある場合が多いと判断しえる。

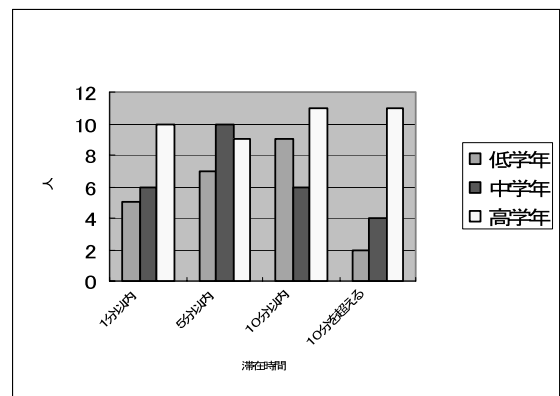


図2. A商店の学年グループ別店内滞在時間別人数

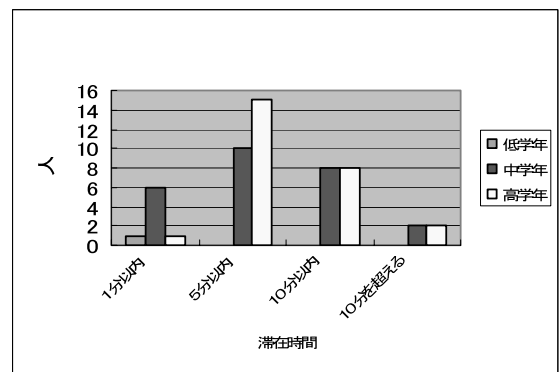


図3 B商店の学年グループ別店内滞在時間別人数

以上の検討は、駄菓子屋3店分を一括して扱ったサンプルをもとにしたものであるが、店ごとに検討した場合は、どのような傾向が認められるであろうか。前述のように店ごとのサンプル数に偏りがあるため、同

条件での比較にはならないが、参考までに店ごとの検討結果を述べる(図2、図3)。C店(図省略)については、サンプルとなった10人すべてが「10分以内」または「10分を超える」であるが、サンプル数自体が少ないうえに、低学年の子どもの利用を確認できなかったこともあり、学年による傾向の判断はしにくい。しかし、A店とB店に関しては、店内滞在時間の学年による違いが明らかである。A店(図2)は、低学年グループが「10分以内」に、中学年グループが「5分以内」にそれぞれピークが認められるが、ともに、「1分以内」と「5分以内」の合計が過半数を占めている。高学年グループは、サンプル全体で41人のうち「10分以内」と「10分を超える」がそれぞれ11人であり、過半数が5分を超えて店内に滞在していることが明らかである。すなわち、高学年グループは来店目的が買い物以外にある者が多いと判断される。いっぽう、B店(図3)は、低学年グループはサンプルが著しく不足しているため判断しにくい、中学年グループと高学年グループともに、「5分以内」にピークが見られ、A店とは傾向を大きく異にする。こうした差異の起る背景には、それぞれの店内の平面レイアウト、商品配置などがもたらす雰囲気の違いなどさまざまな要因があると考えられるが、ひとつには、A店の店員が高学年の子どもの家族として有するため、同じ学校に通う高学年の子どもが比較的多く来店し滞在している事情が介在していると推測しえる。

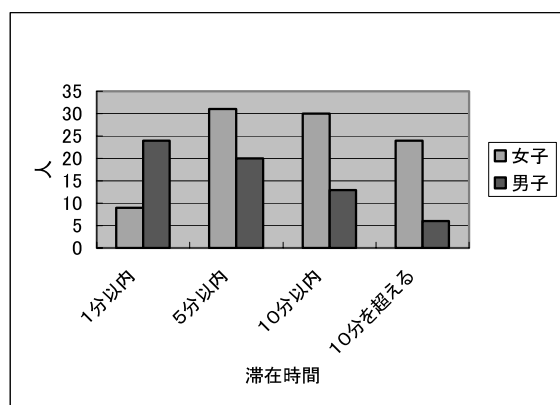


図4. 性別店内滞在時間別人数

2. 3. 性別と店内滞在時間の関係

サンプルとなった子どもを性別に捉えたうえで彼らの店内滞在時間の傾向を検討する(図4)。全サンプルの性別人数は、男子が59人(38.6%)、女子が94人(61.4%)と女子のほうが圧倒的に多く、性差が明瞭に表れている。このように性差が表れる要因を特定することは困難であるが、女子のほうが、駄菓子屋で扱っている商品により魅力を感じているためであるとの推測は可能であろう。男子は、「1分以内」、「5分

内」とともに20人で合わせて40人を数え、全体の約3分の2の者は来店目的が買い物であると判断しえる。観察される彼らの典型的行動パターンは、他に見向きもしないで予定していた商品を手に取り店員とほとんど会話もせずに退出するという、本来の買い物行動である。いっぽう女子は、「1分以内」がわずかに9人で、全体の1割にも満たない点が特徴的である。もっとも多いのは「5分以内」の31人であるが、「10分以内」が30人、「10分を超える」が24人と、5分を超えて店内に滞在する者が過半数を占めていることがわかる。女子は、来店目的が買い物以外にある者のほうが多いと判断しえる。ところで、前節では学年グループ別に検討した結果として、高学年グループの店内滞在時間ももっとも長い傾向のあることを明らかにしている。このことをも勘案すると、本研究での調査データによる限り、駄菓子屋は高学年の女子に「居場所」を提供している性格がやや強いと考えられる⁶⁾。

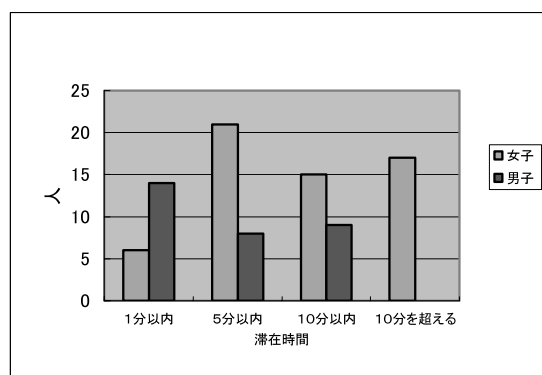


図5. A商店の性別店内滞在時間別人数

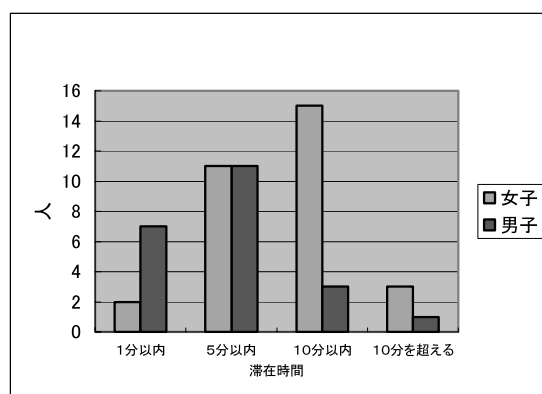


図6. B商店の性別店内滞在時間別人数

店ごとに性別の店内滞在時間を検討した結果も簡単に述べたい(図5、図6)。A店(図5)は、サンプル全体90人のうち女子が59人と約3分の2を占めているだけではなく、店内滞在時間の傾向には、大きな性差が認められる。すなわち、男子は「1分以内」が14人と全体で31人の半数近くを占めていることから、来店目的が買い物にある者が多いことがわかる。それに対して女子は、「1分以内」はわずか6人で1割でい

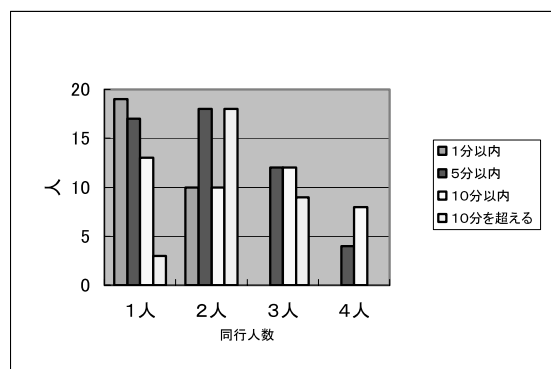


図7. 同行人数別店内滞在時間

どにとどまっております、「10分以内」と「10分を超える」の合計が32人で全体の過半数を占めています。このことから、女子の来店目的は、買い物以外にある者が多いといえる。いっぽうB店(図6)は、男子が「5分以内」に、女子が「10分以内」にそれぞれピークがあり、A店とはやや傾向を異にするが、全般的には女子のほうが店内滞在時間は長い傾向が読み取れる。

2. 4. 来店人数と店内滞在時間の関係

駄菓子屋に来店する子どもは、単独の場合と複数の場合があり、来店時の人数はそのときどきによって異なっている。来店する人数と店内滞在時間との間にはどのような関係があるのかを検討する(図7)。来店する人数の全体的傾向は、単独が52人(34.0%)、2人での来店が56人(36.6%)、3人での来店が33人(21.6%)、4人での来店が12人(7.8%)であった。全体の約3分の1は、単独で来店していることがわかる。また、4人を超える事例は調査時には確認できなかったことから、大勢での来店はないことがわかる。これは、駄菓子屋のスペースが大勢での来店に適していないためであるとも考えられる。単独で来店する子どもの店内滞在時間は「1分以内」19人、「5分以内」17人、「10分以内」13人、「10分を超える」3人であった。店内滞在時間の増加とともに該当人数は減少していることがわかる。このことから、単独での来店は、買い物目的の場合が多いといえる。2人での来店は、全体で56人のうち、「1分以内」と「5分以内」の合計が28人であり、買い物目的の来店とそうでない場合がちょうど半数ずつであったことがわかる。3人および4人での来店の場合は、サンプル数は多くないが、「10分以内」と「10分を超える」の占める割合が過半数を占めており、人数の多いほうが店内滞在時間は長くなる傾向のあることがわかる。

来店人数と店内滞在時間との間には相関関係があることがうかがえるが、この背後では、子どもたちのどのような実態が関連しているのであろうか。単独で来店する子どもは、購入する商品について相談すること

や、「トレーディング・カード」⁷⁾を買って一緒に喜び悔しがることを共有する仲間がいないため、買い物行動のほかに意識が向かず、目的としていた買い物を終えるとただちに店から離れる傾向があるように思われる。その結果として店内滞在時間は短くなるのであろう。複数での来店の場合は、買いたい商品に関する情報を他の子どもと交換し合うことや、店内でトレーディング・カードを見せ合うなどのコミュニケーション行動をとる様子が観察される。また、店員と会話を交わすことは、単独の場合恥ずかしいという心理が働き遠慮することがあると考えられるが、複数の場合は集団心理が働き、恥ずかしくなくなると考えられる。こうしたさまざまな要因により、複数での来店の場合は、店内滞在時間が長くなるものと考えられる。

3. 駄菓子屋における店員と子どもとの会話内容

本章では、駄菓子屋の店員と来店した子どもとの間に交わされた会話の内容を具体的に取り上げ、会話の背後にある意味を検討する。調査者が記録しえた会話は14事例であったが、本章では7事例を取り上げ、調査月日、調査した店名、事例に関わった子どもの店内滞在時間、子どもの属性を記述するとともに、ありのままの会話を再現・記述した。また、店員へのヒアリング結果を必要に応じて参考にしながら、会話の背後にどのような事実が潜んでいるのかについて検討を加えた。調査時に記録した会話内容は、いわゆる世間話(6事例)、買い物・会計に関する会話(4事例)、子どもに対する注意(4事例)の3パターンに分類できるが、以下では世間話に該当する4事例、子どもに対する注意に該当する3事例の計7事例を取り上げ、具体的に述べていく。これに基づいて次章では、店員と子どもとの会話全般に共通する問題や教育的機能として評価すべき内容及び背景について考察を述べる。記録内容のうち「」は子どもの発言を、[]は店員の発言を、それぞれ指している。()は、会話時の状況に関する説明である。なお、発言に付した子どもの名前はすべて架空のものである。

3. 1. 世間話

事例1：10月3日水曜日 A商店 16：15～16：26
低学年 女子2人

愛子「おばちゃん、うちの犬な、昨日脱走してん。」
良子「さがしてー。」
[おばちゃん、どこさがすん] (探せるわけがないというように)
愛子「あ、おばちゃんさがされへんのや。ほな、うちらでさがそ。」
[あぶないところ、行ったらあかんでー]

愛子と良子のふたりは、11分という長い時間を店内

で過ごし、この他にもトレーディング・カード、菓子の値段などについて、店の婦人と会話を交わしていた。事例1として取り上げた会話は、彼女達が帰る間に交わされたものである。彼女達は、店の婦人に本当に犬を探して欲しいと願っているのではないと思われる。それは、当然のことながら店の婦人にも理解されていることであるが、そのうえで子ども達の話の聞いてあげることが読み取れる。子ども達にとっても、犬を探して欲しいという要求は単に話題として取り上げたにすぎず、むしろ店の婦人と、なんらかの会話を交わしたかったのではないだろうか。店の婦人へのヒアリング結果によると、駄菓子屋に来店する子どもは、帰宅しても保護者の不在が多いという。

店の婦人の対応も会話の様子から、話相手になって欲しいという子ども達の願望に気付いているように読み取れる。親身になって聞いている訳でもなく、また、突き放している訳でもない。この距離感ともいえる関係性の保ち方が、駄菓子屋の店員に求められている態度であり、また、子ども達が求めているものであるといえよう。

事例2：10月3日水曜日 A商店 16：20～16：22
低学年 男子1人

(発熱時に用いる保冷剤を額に着けて来店した春男に、店員の婦人が声をかけた。)

[なんや、どしたん、おでこ。]

春男「なんでもない。」

[しんどいんやろ。]

春男「ちがうよ。」

[そうか。はよ、帰りや。]

春男は、実際に発熱していたのではないように思われる。発熱を抑えるための保冷剤を保護者の手で額に貼られたのであれば、外出が規制されるはずだからである。また、発熱していないのに保冷剤を額につけるといふ「いたずら」をしたままの外出を保護者が許可するとは考えにくい。おそらくこの子どもは少し体調が悪いといういでどで、これまでに病気になった時の経験から自分で判断して保冷剤を額に貼ったのではないかと思われる。「体調は悪いが遊びたい、でも体調が悪いのに外出するのだから、誰かに心配もしてもらいたい」と思った結果なのではないかと考えられる。

いっぽう、店の婦人の反応はこの子どもの願望どおりであったといえよう。この子どもは誰かに「心配もしてもらい、かまってもらう」ことに成功している。そして店の婦人に「うっとおしい」と思われる前に、店から離れているといえる

事例3：5月19日土曜日 A商店 13：53～14：10
高学年 女子3人

[遠足まだか。]

由美子「今年は、修学旅行。」

恭子「400円分買いにくるな。」

[500円くらい買っても分かん。]

恭子「ほんとは300円やねん。」

この会話が交わされたときの店員は、通常店番をする婦人ではなくその夫であった。子ども達の態度は、婦人とその夫では、微妙に違っているように思われた。どちらかといえば子どもは、婦人よりもその夫のほうにより親近感を懐いている様子が観察された。婦人の年齢と自分の母親の年齢が比較的近いため自分の母親を思い出し、婦人に対して「仲間」という感覚を持っていないためとも考えられる。夫に対しては、子どもは「仲間」という感覚で話しており、子ども同士で共有している「秘密」のことがらを話し、「生意気な」話し方をする。事例3の場合では、子どもは、学校の指導に違反することを同調してくれる人にしか話さないという傾向が読み取れる。相手が、違反に同調してくれるのか、違反を許さず指導するのかどうかを子ども達は的確に見抜いているといえよう。このような「仲間」になってくれる大人は子どもの身の周りに多くは存在しないという背景もここではあるように思われる。

「仲間」であると信頼されたこの男性店員はその信頼に見合った対応をしているように思われる。注意や説教をして、子どもの信頼を失うよりもある程度までは見守ってやるのがいいと判断し、男性の店員はこのような態度をとったものと思われる。この男性店員によるこうした一連の対応は、商店経営の立場から売り上げ増加を意図したものとは考えにくい。むしろ、「居場所」や話し相手を求めて来店した子ども達の期待を裏切らないよう日頃から配慮しているためと考えられる。

事例4：5月23日水曜日 B商店 15：52～15：58
高学年女子2人

鈴子「6月6日誕生日やねん。」

[もーすぐやな。]

[いくつになるの?]

鈴子「12歳、その割には小さいやろ」

[心配ないわ、うちの姉ちゃんも中学校くらいまで小さかったよ。]

来店した子どもが店員にまず伝えたかったことは、誕生日が近いことであつたと考えられる。子どもにとって、誕生日は一年に一度自分がいわば主役になることができる日であるといえる。自分から店の婦人に話し掛ける子どもは比較的少ないが、自分に関わることを自ら進んで話していることから、この子どもは店の婦人に対して、自分に関心を向けて欲しい、自分のことを話題の中心にして欲しい、という心理のあることが読み取れる。

事例4の会話では、子どもが自分のいわば悩み事ともいえる日頃から気にしていることを店の婦人に訴えている内容も見られる。けっして深刻な捉え方である

とはいえないが、「その割には小さいやろ」という発言にはいっぼうでそのことを否定してほしいという願望が含まれているようにも読み取れる。おそらく、店の婦人に甘え、否定して欲しかったものと思われる。この発言に対して、店の婦人は、子どもの願望どおりに対応してあげており、かつ、慰めにあたる言葉を話し掛けている。「すぐ、伸びる。」などと励ますとともに、店員の婦人が自身の子どもの具体的な例を挙げることで、この子どもは安心感を懐くことができたに違いない。また、6年生であるこの子どもに、もうすぐ中学生になるという具体的な目標を設けることで、子どもの未来に対する希望を持たせているように思われる。

3. 2. 子どもに対する注意

事例5：10月3日水曜日 A商店 14：42～14：50
高学年 男子4人

(制服とランドセルを着けたままの学校帰りの子どもに対して、婦人が注意を促す。)

[一回帰ってから、来]

(子ども達は注意を無視し、自動販売機を叩く、他の客の自転車に触るなどの行為をする。)

[そんなんしとらんと、はよかえり。]

(子ども達は行為を続ける。)

[これ、わるいことしたらあかん]

この事例では、子どもは一言も話してはいないため、厳密には会話とはいええないものである。店の婦人が、何度か話かけているが、子ども達は無視したり、一瞥する程度にとどまっていた。しかし、「はよかえり。」という発言が終わったあとには、子ども達は、注意に従うかのように、帰宅のために家の方向に向かっていった。店員へのヒアリング結果によると、この事例に関わった子ども達は繰り返し店の前で菓子を食べ散らかしたり、店前にある自動販売機を叩いたりして、店側は迷惑を被っているとのことである。しかし、万引きなど犯罪には相当しないため保護者を呼んだりはず、困惑しているという。この場合、もし子どもの側が悪いことと自覚していながらこうした行為を繰り返していれば、この店の前でこのような行為を働くこと自体に意味があるのではないだろうか。行為そのものへの欲求があるのではなく、店の婦人にたとえ注意という形でも関わりを持って欲しいという心理が見え隠れする。

いっぼう、店の婦人は、子ども達によるこれら一連の行為に対して困惑しながらも、親近感すら込めて声をかけているように思われた。実害があるとすれば、子どもたちが来た時に厳重に注意するはずである。しかし、この子ども達が店の前で話をしているのをしばらくは静観していたこと、注意の仕方初めから行為そのものに注意するのではなく、他への関心を促すこ

とが目的のような注意であったので、その子どもたちを「悪い子ども」である、と断定的に評価しているのではないと読み取れる。また、そのように接することによって、子どもたちにとって敵ではないと思わせる効果を意図しているとも考えられる。

事例6：5月23日水曜日 B商店 15：37～15：41
高学年 男子2人

(自転車で来店している子どもに対して、店の婦人が注意を促す。)

[自転車で来とる子、よけたらな邪魔なるで。あそんどの子にもゆーたり。]

太郎「うん。」

B商店の建物は、自動車を通る道路沿いに立地している。駐輪場などはない。来店の際、子どもたちの大半は自転車で移動してくるため、子どもたちは自転車を店の前に一時的に並べて停めている。道幅が狭いため、整頓して並べないと自動車通行時の邪魔になる様子が見られる。子ども達にとって、自転車を整頓して並べるということは、確実に実行すべきものとして認識しているいっぼうで、できれば、やりたくないことのひとつであろう。そのことを、店の婦人も理解しているの、で、厳しい言い方でないように注意することができ、また、子どもたちも注意されたことに対して、反抗したりせずに、素直に聞き入れることができるのであろう。双方の間に信頼関係が築かれているからこそ成立する会話であると思われる。

事例7：9月12日水曜日 B商店 15：41～15：47
高学年 女子1人

(学校帰りに店を覗いている子どもに対して来店していた子どもが注意を促す。)

優子「学校帰りに来たあかんねんで。」

[200円全部使うんか?]

優子「うん、ええねん。」

この事例では、注意していたのは客の1人である女子であった。会話の内容からは、注意している対象の子どもに対してこの女子は面識がないと判断される。正義感が強く悪いことを見逃せないタイプの子どものあるといえよう。しかし、この子どもが知り合いでもない子どもに注意を与えたことによって、注意された子どものほうが驚き反論こそしなかったものの、店内の雰囲気が悪くなってしまった。それを感じ取った店の婦人が、別の話題をこの女子に与えたものである。店の婦人によれば、子ども達同士では多少の悪いことは気が付かないように装うことも多いとのことである。子ども達の間にも、店内は多少の悪いことをしても差し支えない場所として認識している様子がうかがえる。このような状況で、客の1人であった子どもからいわば正論を唱えられて、注意された子どもはやや意外だったのであろう。直接的な注意ではないが、その場の雰囲気から、子ども同士が無用な争いを起こさ

ないようにすることを、店の婦人は、心得ていると思われる。

4. 駄菓子屋の教育的機能の性格・特徴

4. 1. 子どもが求めているもの

4. 1. 1. 子どもの自己表現を受容する相手

前章で挙げた「世間話」の事例に共通して横たわっているのは、自分のことを誰かに話したい、自分を中心とした会話を誰かとしたという子どもの願望であると思われる。子どもの願望は、話し相手としての駄菓子屋の店員から、できれば何らかの反応は欲しいが、といてとくに助言や協力を求めるものではないというていどの欲求であるように思われる。事例1~4はそれが顕著に表れているといえる。いずれの事例においても、子どもは、相手の反応が確実に得られる言葉を発し、行動を取ることによって、取り敢えずの欲求は満足されたとみなされよう。

子ども達がこうした願望を駄菓子屋の店員に求める理由は、放課後から夕方までの間、子どもに話し相手がないからであると思われる。一般に学校から帰宅した時子どもは多くのことを家族に話したいものであろう。しかし、帰宅時に家族がいない、あるいは家族がいても仕事で忙しいなどの事情で話をじっくり聞いてもらえない状況であれば、誰かに話をしたいという子どもの願望が外に向かっていくのは当然の成り行きであろう。その願望の向かっていった先が駄菓子屋だったのであり、駄菓子屋は、そうした子どもの願望を受容できる機能を有していると考えられる。

4. 1. 2. 注意してほしい相手

取り上げた事例5~7は、子どもが、自分に注目して欲しい、自分だけに関わって欲しいが自分から話しかけることができず、少し悪いことをすれば注目してくれるであろうと、期待したことを示している。事例5は、そのことがとくに顕著にあらわれたものであると考えられる。また、事例6は、注意されることを期待してはいないまでも、自転車の整理ができていないために注意されている事例である。しかし、自転車の置き方に関しては、繰り返し注意されても改善されることはなく、注意されるたびに、反抗することもなく店員の注意に従っている。頻繁に注意されても店員の婦人に対して特に嫌悪感を持たないのは、店員の婦人の人柄によるものではあろうが、むしろ子ども達には、無視されず、親身にもなりすぎない立場の人間に注意されることにむしろ安心感を得ている面があるのではないか。言い換えれば、子ども達は、無意識のうちに、駄菓子屋の店員から注意されることによって自らの存在を確認していると考えられるのである。自らの存在確認の相手として選ばれたのが駄菓子屋の店員だったということであろう。駄菓子屋には、子どもが自己の

存在を確認し、安心できる機能があると考えられる。

4. 2. 店員からのメッセージ

4. 2. 1. 店員は子どもの「仲間」であること

事例1~4から、駄菓子屋の店員が子ども達に示す基本的な態度は、店員が子どもの「仲間」であるということであろう。これは、「いたずら」や、少々の規則違反であればそれを共有できる関係であることを示しているといえる。たとえ、注意する場合であっても、厳しい口調で行うことは極力避けているように見える。店員が子ども達に注意をするかどうかは、子ども達の「いたずら」を店員がどこまで許せるかという許容範囲によるのであろうが、店員の対応は概ね、子ども同士の些細なトラブル、他人に対する非難めいた発言の場合では注意を与えず、むしろ、積極的に聞いてあげている場合も見られる。本来、「悪い」と言われる行為に興味を示してくれ、共感してくれる大人の存在は、子どもにとって貴重であるといえる。このことがもっとも顕著に現れていると考えられるのが事例3である。修学旅行に持参する菓子類を購入する際の上限金額をめぐるこの会話では、子ども達が規則を破るのを黙認するどころか、規則違反を勧めてすらいる。大人が子どもの意識に合わせることで、子どもにとって、その大人は「仲間」であるという意識が強くなるのではないと思われる。これらのことから、駄菓子屋は、そこに行けば必ず「仲間」がいるという安心感を子どもに与える機能を有していると考えられる。

4. 2. 2. 子どもの観察者としての大人であること

事例5~7から、駄菓子屋の店員は、子ども達の好ましくない行為を見て注意を与える存在としての大人であるといえる。しかし、注意のしかたには保護者や教師などとは異なった工夫がされている。厳しい注意の仕方を避け決して徹底はしない。すでに注意したことを再度注意する場合には、表現を変えて、子どもにとっては違うことを注意されていると聞こえるように声をかけている。その場で何度も同じ注意を繰り返すことで、子どもが反発して小売業として成り立たなくなるといふ側面はあるにちがいないにしても、このような注意の仕方であれば、子どもにとっても素直に聞ける部分があると思われる。

また、駄菓子屋の店員は、来店する子どものことをきわめて正しく観察しているように思われる。ひとりひとりの子どもの顔、名前、性格、通っている学校、学年、家庭の状況などを長期間経過しても概して正確に記憶している。調査中に偶然、子どもの頃「常連」だったという成人が駄菓子屋に訪ねてきたことがあったが、店員は彼を正確に記憶していた。また、「常連」の子ども達についても、「最近荒れてるな」、「機嫌いいな」といった観察結果を当該の子どもには言わないが、独り言のようにつぶやいたり、調査者に説明して

くれたりした。駄菓子屋の店員は「子どもを見る正確な眼」を持っているといえる。

駄菓子屋の店員は、このように子どもの観察者としての側面を有しており、このことは子どもの側も無意識のうちに理解はしているものと思われる。子どもにとって、駄菓子屋には、自分のことをよく理解してくれている人がいるという安心感は、得難いものであるといえよう。そのこと自体に教育的機能が備わっていると見ることができる。

5. おわりに

本研究は、従来必ずしも評価がなされてこなかった駄菓子屋の教育的機能を、筆者らの実態調査によって得た資料にもとづいて具体的に明らかにすることをめざしたものである。駄菓子屋に来店した子どもの学年、性別、同行人数、店内滞在時間を把握するとともに、店員と子どもとの間に交わされた会話を記録し、検討を加えた。その結果、子どもの店内滞在時間は個人差が大きい、高学年の女子児童が複数で来店すると概して店内滞在時間は長くなる傾向のあることが認められた。店員と子どもとの間に交わされた会話は、いわゆる世間話、買い物・会計に関する会話、子どもに対する注意の3つのパターンが認められた。会話内容の背後にあるものを検討すると、駄菓子屋には、次のような教育的機能が備わっているといえる。

- 子どもの願望を受容できる機能
- 子どもが自己の存在を確認し、安心できる機能
- 駄菓子屋に行けば仲間がいるという安心感を子どもに与える機能
- 子どものことを日頃から観察している理解者がいるという機能

駄菓子屋は、成文化された教育目標やカリキュラムなどを有しないため、学校とは全く性格を異にするものである。しかし、駄菓子屋における子どもの生態や店員と子どもとの関わりを見る限り、駄菓子屋はさまざまな教育的機能を有しており、地域の教育力の一翼を十分に担える存在として評価されるべきものである。

翻って、教育関係者は、現在の学校では駄菓子屋に備わった教育的機能が果たして十分に発揮されているかどうか、改めて見直しを図るべきであろう。

付記

本稿は、筆者のひとりである細谷が、平成13年度奈良教育大学卒業論文として提出したものをベースに、岩本が細谷の了承のもと、全面的に改稿したものである。Ⅰ、Ⅱ章とⅤ章は、岩本が新たに文章を書き起こし、Ⅲ、Ⅳ章は、細谷の原文を生かしながら改稿した

ものである。

末筆ながら、細谷が調査した当時、営業妨害になりかねないような行為を快く認めてくれた駄菓子屋の店員諸氏にこの場を借りて御礼申し上げたい。もしかすると、駄菓子屋の教育的機能がもっとも発揮されたのは、細谷に対してであったかもしれないとの感を今抱かずにはいられない。

本稿の文責は岩本にあることをお断りしておく。

注

- 1) 『広辞苑』(岩波書店、第5版)によれば、「駄菓子」とは「粟、豆、くず米などの安価な材料を用いた大衆的な菓子」のことをいう。現在の日本では、このような意味での駄菓子を販売する商店はほとんど存在しないといってよい。しかし、子ども向けの比較的安価な菓子類などを扱っている商店は、各地で見られる。近年は、コンビニエンスストア内の一角に子ども向けの菓子類などが並べられている場合も見られる。こうした近年の駄菓子屋の動向については、松田(2002)に詳しい。
- 2) 駄菓子屋は商業統計には現われず、また、電話帳などでも分類項目として採用されていない。そのため、奈良市内で何軒の駄菓子屋が存在するのかは不明である。A、B、Cの3店は、筆者らの現地観察の中でたまたま発見できたものである。
- 3) 本研究で採用した調査方法は、箕浦ほか(1999)を参考に筆者らが独自に考案したものである。
- 4) 子どもの店内滞在時間の計測は、調査者の腕時計を用いて行った。多少の誤差はあるものと思われる。
- 5) ここで示した店内滞在時間の区分およびそれぞれに対応する子どもの実態傾向は、全サンプルの観察結果から経験的に導き出したものである。滞在時間と子どもの実態とは100%合致している訳ではなく、食い違う事例もある。
- 6) 駄菓子屋が、高学年女子に「居場所」を提供している性格を有することが国内で一般的であるかどうかは、より広範な実態調査が実施されないと判然としない。
- 7) トレーディング・カードとは、漫画などに登場するキャラクターが描かれており、ゲームに使用するものである。コレクションの対象にもなっている。

文献

- 深谷昌志、『子どもの生活史』、黎明書房、1996年、295ページ。
 深谷昌志ほか、『モノグラフ・小学生ナウ10-10、金

- 銭感覚』、福武書店、1991年、56ページ。
- 深谷昌志ほか、『モノグラフ・小学生ナウ21-3、子どもの放課後』、ベネッセコーポレーション、2002年、122ページ。
- 本田和子、『変貌する子ども世界』、中央公論新社、1999年、230ページ。
- 岩本広美、子どもの心像環境における「身近な地域」の構造、地理学評論、54巻3号、日本地理学会、1981年、127-141。
- 加太こうじ、『下町で遊んだ頃-「子どもの文化」再考』、教育研究社、1979年、236ページ。
- 加藤 理、『駄菓子屋・読み物と子どもの近代』、青弓社、2000年、219ページ。
- 木下 勇、『遊びと街のエコロジー』、丸善、1996年、208ページ。
- 松田道雄、子どもの居場所・「駄菓子屋」・16の価値-現代子ども文化と学校文化の比較の中で-、山形大学教育学部附属中学校研究紀要、33号、山形大学教育学部、1998年、11-69。
- 松田道雄、『駄菓子屋楽校-小さな店の大きな話・子どもが開く未来学-』、新評論、2002年、600ページ。
- 箕浦康子ほか、『フィールドワークの技法と実際-マイクロ・エスノグラフィー入門-』、ミネルヴァ書房、1999年、229ページ。
- 斎藤次郎、『放課後の子どもたち』、岩波書店、1983年、234ページ。
- 酒川 茂、『地域社会における学校の拠点性』、古今書院、2004年、308ページ。